

# 運

芥川 龍之介

藍岩堂



# 運



藍岩堂



目のあらい 簾すだれ が、入口にぶらさげてあるので、往来の容子は仕事場においても、よく見えた。  
清水きよみず へ通う往来は、さっきから、人通りが絶えない。金鼓こんく をかけた法師ほうし が通る。壺装束つぼしょうぞく をし  
た女が通る。その後あとからは、めずらしく、黄牛あめうし に曳かせた網代車あじろぐるま が通った。それが皆、疎まばら な  
蒲がま の簾すだれ の目を、右からも左からも、来たかと思うと、通りぬけてしまう。その中で変らない  
のは、午後あぶの日が暖かに春を炙っている、狭い往来の土の色ばかりである。

その人の往来を、仕事場の中から、何と云う事もなく眺めていた、一人の青侍あおざむらい が、この時、  
ふと思いついたように、主あるじ の陶器師すえものづくり へ声をかけた。

「不相変あいかわらず、観音様かんのんさま へ参詣する人が多いようだね。」

「左様でございます。」

陶器師すえものづくり は、仕事に気をとられていたせいか、少し迷惑そうに、こう答えた。が、これは眼の  
小さい、鼻の上を向いた、どこかひょうきんな所のある老人で、顔つきにも容子にも、悪気らし  
いものは、微塵みじん もない。着ているのは、麻あさ の帷子かたびら であろう。それに萎えた揉烏帽子なもみえぼし をかけた  
のが、この頃評判とばそうじょう の高い鳥羽僧正とばそうじょう の絵巻の中の人物を見るようである。

「私も一つ、日参にっさん でもして見ようか。こう、うだつが上らなくちゃ、やりきれない。」

「御冗談ごじょうだん で。」

「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だって、信心しんじん をするよ。日参にっさん をしたって、参籠さんろう を  
したって、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなもの  
のさ。」

青侍は、年相応うわちようし な上調子な の言いをして、下唇を舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を  
見廻した。——竹藪たけやぶ を後うしろ にして建てた、藁葺わらぶ きのあばら家だから、中は鼻がつかえるほど狭い  
。が、簾すだれ の外の往来が、目まぐるしく動くのに引換えて、ここでは、甕かめ でも瓶子へいし でも、皆あか 緒あか ちゃ  
けた土器かわらけ の肌はだ をのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からそうしていたように、ひっそりかん  
と静まっている。どうやらこの家の棟むね ばかりは、燕つばめ さえも巢を食わないらしい。……

翁おきな が返事をしないので、青侍はまた語を継いだ。

「お爺さんなんでも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたろうね。どうだい  
。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左様でございます。昔は折々、そんな事もあったように聞いて居りますが。」

「どんな事があったね。」

「どんな事と云って、そう一口には申せませんがな。——しかし、貴方あなた がたは、そんな話をお聞  
きなすっても、格別面白くもございませんまい。」

「可哀しんじんぎ そうに、これでも少しは信心しんじんぎ 気のある男あす なんだぜ。いよいよ運が授かるとなれば、明日  
にも——」

「信心気でございますかな。商売気でございますかな。」

翁おきなは、めじり 眦しわに皺こをよせて笑った。捏ねていた土が、壺つぼの形になったので、やっと気が楽になったと云う調子である。

「神仏の御考えなどと申すものは、あなた 貴方がたくらいのお年では、中々わからないものでございませよ。」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだあね。」

「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないと云う事じゃございません。そのお授けになる運の善し悪しと云う事が。」

「だって、授けて貰えばわかるじゃないか。善い運だとか、悪い運だとか。」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましょうて。」

「私には運の善し悪しより、そう云う理窟の方がわからなそうだね。」

日が傾き出したのであろう。さっきから見ると、往来へ落ちる物の影が、心もち長くなった。

その長い影をひきながら、かしら 頭おけに桶をのせた物売りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産みやげらしい桜の枝を持っていた。

「今、西の市で、いち 績麻うみそのみせ 廓を出している女なぞもそうでございますが。」

「だから、私はさっきから、お爺さんの話を聞きたがっているじゃないか。」

二人は、暫くの間、黙った。青侍は、爪で頤あごのひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めている。貝殻のように白く光るのは、おおかた 大方さっきの桜の花がこぼれたのであろう。

「話さないかね。お爺さん。」

やがて、眠そうな声で、青侍が云った。

「では、御免を蒙って、一つ御話し申しましょうか。また、いつもの昔話でございますが。」

こう前置きをして、すえものつくり 陶器師の翁は、おもむろ 徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないような、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もうかれこれ三四十年前になりましょう。あの女がまだ娘の時分に、このきよみず 清水のがん 観音様へ、願をかけた事がございました。どうぞ一生安楽に暮せますようにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたった一人のおふくろにしにわか 死別にちにちれた後で、それこそ日々の暮しにも差支えるような身の上でございましたから、そう云う願をかけたのも、がん 満更まんざら無理はございません。

「死んだおふくろと申すのは、もとはくしゅしゃ 白朱社みこの巫子で、一しきりは大そう流行ったものでございませが、きつね 狐うわさを使うと云う噂を立てられてからは、めっきり人も来なくなってしまったようでございます。これがまた、白あばたの、年に似合わず水々しい、大がらな婆さんでございましてな、ようす 何さま、あの容子じゃ、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺いたいね。」

「いや、これは御挨拶で。——そのおふくろが死んだので、後は娘一人のや 瘦せ腕でございませから、いくらかせいでも、くらし 暮きりょうの立てられようがございませぬ。そこで、あの容貌のよい、りはつもの 利発者の娘が、こも お籠りをするにも、つづれ 檻褌故に、あたりへ気がひけると云う始末でございました。

」

「へえ。そんなにい好い女だったかい。」

「左様でございます。氣だてと云い、顔と云い、手前の欲目では、まずどこへ出しても、恥しくないと思いましたがな。」

「惜しい事に、昔さね。」

青侍は、色のさめた藍のすいかん水干の袖口を、ちよいとひっぱりながら、こんな事を云う。翁は、笑  
声を鼻から抜いて、またゆっくり話しつつけた。後うしろの竹藪では、頻しきりに鶯うぐいすが啼いている。

「それが、さんしちにち三七日の間、お籠りをして、今日が満願と云う夜に、心よと夢を見ました。何でも、同  
じ御堂に詣っていた連中の中に、背むしの坊主ぼうずが一人いて、そいつが何か陀羅尼だらにのようなものを  
、くどくど誦していたそうでございます。大方それが、氣になったせいでございます。うと  
うと眠気がさして来ても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で  
みみず蚯蚓でも鳴いているような心もちで——すると、その声が、いつの間にやら人間のことば語になって  
、『ここから帰る路で、そなたに云いよる男がある。その男の云う事を聞くがよい。』と、こう  
聞えると申すのでございますな。

「はっと思って、眼がさめると、坊主はやっぱりだらにざんまい陀羅尼三昧でございます。が、何と云っている  
のだから、いくら耳を澄ましても、わかりませぬ。その時、何気なく、ひょいと向うを見ると、  
しょうやとう常夜燈のぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃おが拝みなれた、たんごんみみょう端巖微妙の御  
顔でございますが、それを見ると、不思議にもまた耳もとで、『その男の云う事を聞くがよい。  
』と、誰だか云うような気がしたそうでございます。そこで、娘はそれをおつげ観音様の御告だと、  
いちず一匁に思いこんでしまいましたげな。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五条へくだらうとしますと、案  
しょううしろの定後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩あいにくでございましたが、生憎の  
暗で、相手の男の顔も見えなければ、着ている物などは、なお猶の事わかりませぬ。ただ、ふり離そ  
うとする拍子に、手が向うのくちひげ口髭にさわりました。いやはや、とんだ時が、まんがん満願の夜に当たっ  
たものでございます。

「その上、相手は、名きを訊かれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。ただ  
、云う事を聞けと云うばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるようにして  
、つれて行きます。泣こうにも、わめ喚こうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がござ  
いませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとうやさか八坂寺の塔の中へ、つれこまれて、その晩はそこですごしたそうござい  
ます。——いや、そのへん辺の事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもござい  
ますまい。」

おきな めじり しわ  
翁は、また 眦に皺をよせて、笑った。往来の影は、いよいよ長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせいであろう、そこここに散っている桜の花も、いつの間にかこっちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、点々と白い色をこぼしている。

「冗談云っちゃいけない。」

青侍は、思い出したように、頤あごのひげを抜き抜き、こう云った。  
「それで、もうおしまいかい。」

「それだけなら、何もわざわざお話し申すがものはございませぬ。」翁おきなは、やはり壺つぼをいじりながら、「夜があげると、その男が、こうなるのも大方宿世の縁だろうから、とてもの事に夫婦みょうとになってくれと申したそうでございます。」

「成程。」

「夢の御告げでもないならともかく、娘は、観音様のお思召おぼしめし通りになるのだと思ったものでございませぬから、とうとう首かぶり たてを豎にふりました。さて形ばかりの盃事かた さかずきごとをすませると、まず、当座の用にと云って、塔の奥から出して来てくれたのが綾あやを十足に絹びきを十足でございます。——この真似まねばかりは、いくら貴方あなたにもちとむずかしいかも存じませぬな。」

青侍は、にやにや笑うばかりで、返事をしない。驚も、もう啼かなくなった。

「やがて、男は、日の暮くれに帰ると云って、娘一人を留守居るすいに、慌あわただしくどこかへ出て参りました。その後の淋あとしさは、また一倍でございます。いくら利発者でも、こうなると、さすがに心細くなるのでございましょう。そこで、心晴らしに、何気なく塔の奥へ行くと、どうでございましょう。綾おろかや絹さきんは愚かねめな事、珠玉とか砂金とか云う金目の物が、皮匣かわごに幾つともなく、並べてあると云うじゃございませぬか。これにはああ云う気丈な娘でも、思わず肚胸とむねをついたそうでございます。

「物にもよりますが、こんな財物たからを持っているからは、もう疑うたがひはございませぬ。引剥ひはぎでなければ、物盗りものどでございます。——そう思うと、今まではただ、さびしいだけだったのが、急に、怖かたときいのも手伝って、何だか片時もこうしては、いられないような気になりました。何さま、悪ほうめんく放免あの手にもかかろうものなら、どんな目に遭うかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす気で、急いで戸口の方へ引返そうと致しますと、誰かわごだか、皮匣うしろの後から、しわがれた声で呼びとめました。何しろ、人はいないとばかり思っていた所でございますから、驚いたの驚かないのじゃございませぬ。見ると、人間とも海鼠なまこともつかないようなものが、砂金の袋を積んだ中に、円まるくなって、坐しわって居ります。——これが目くされの、皺だらけの、腰のまがった、背の低い、六十ばかりの尼法師あまほうしでございます。しかも娘の思惑おもわくを知ってか知らないでか、膝ひざで前へのり出しながら、見かけによらない猫撫声ねこなでごえで、初対面あいざつの挨拶をするのでございます。

「こっちは、それ所の騒さわぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云う巧みたくをけどられな

どしては大変だと思ったので、しづしづ皮匣の上に肘をつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子では、この婆さんが、今まであの男の炊女か何かつとめていたらしいのでございます。が、男の商売の事になると、妙に一口も話しませぬ。それさえ、娘の方では、気になるのに、その尼がまた、少し耳が遠いと来ているものでございますから、一つ話を何度となく、云い直したり聞き直したりするので、こっちはもう泣き出したいほど、気がじれます。――

「そんな事が、かれこれ午までつづいたでございましょう。すると、やれ清水の桜が咲いたの、やれ五条の橋普請が出来たのと云っている中に、幸い、年の加減か、この婆さんが、そろそろ居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかったせいもあるのでございましょう。そこで、娘は、折を計って、相手の寝息を窺いながら、そっと入口まで這って行って、戸を細目にあけて見ました。外にも、いい案配に、人のけはいはございませぬ。――

「ここでそのまま、逃げ出してしまえば、何事もなかったでございしますが、ふと今朝貰った綾と絹との事を思い出したので、それを取りに、またそっと皮匣の所まで帰って参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまずいて、思わず手が婆さんの膝にさわったから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫くはただ、あっけにとられて、いたようでございしますが、急に気ちがいのようになって、娘の足にかじりつきました。そうして、半分泣き声で、早口に何かしゃべり立てます。切れ切れに、語が耳へはいる所では、万一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇うかも知れないと、こう云っているらしいのでございませぬ。が、こっちもここには命にかかわると云う時でございませぬ。元よりそんな事に耳をかす訳がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴る。砂金の袋をなげつける。――梁に巢を食った鼠も、落ちそうな騒ぎでございませぬ。それに、こうなると、死物狂いだけに、婆さんの力も、莫迦には出来ませぬ。が、そこは年のちがいでございませぬ。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇にかかえて、息を切らしながら、塔の戸口をこっそり、忍び出た時には、尼はもう、口もきかないようになって居りました。これは、後で聞いたのでございませぬ。死骸は、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまま、薄暗い隅の方に、仰向けになって、臥ていたそうでございます。

「こっちは八坂寺を出ると、町家の多い所は、さすがに気がさしたと見えて、五条京極辺の知人の家をたずねました。この知人と云うのも、その日暮しの貧乏人なのでございませぬ。絹の一疋もやったからでございませぬ。湯を沸かすやら、粥を煮るやら、いろいろ経営してくれたそうでございます。そこで、娘も漸く、ほっと一息つく事が出来ました。」

「私も、やっと安心したよ。」  
青侍は、帯にはさんでいた扇をぬいて、簾の外の夕日を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁が五六人、騒々しく笑い興じながら、通りすぎたが、影はまだ往来に残っている。……

「じゃそれでいよいよけりがついたらと云う訳だね。」

「所が」<sup>おきな おおぎょう</sup>翁は<sup>しりびと</sup>大仰に首を振って、「その知人の家に居りますと、急に往来の人通りがはげしくな<sup>のし</sup>って、あれを見い、あれを見いと、罵<sup>うしろぐら</sup>り合う声が聞えます。何しろ、後暗い体ですから、娘はまた、胸を痛めました。あの物盗りが仕返ししにでも来たものか、さもなければ、<sup>けびいし おって</sup>検非違使の追手がかりでもした<sup>かゆ すす</sup>ものか、——そう思うともう、おちおち、粥を啜っても居られませぬ。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間から、そっと外を覗いて見ると、見物の男女の中を、<sup>なんによ ほうめん</sup>放免が五六人、それ<sup>かどのおさ</sup>に<sup>さ</sup>看督長が一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、縄にかかった男が一人、所々裂けた水干を着て<sup>えぼし</sup>烏帽子もかぶらず、曳かれて参ります。どうも物盗りを捕えて、これからその住家へ、<sup>すみか じつろく</sup>実録をしに行く所らしいのでございますな。

「しかも、その物盗りと云うのが、<sup>ゆうべ</sup>昨夜、五条の坂で云いよった、あの男だそうじゃございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて来たそうでございます。これは、当人が、手<sup>なわめ</sup>前に話しました——何も、その男に惚れていたの、どうしたのと云う訳じゃない。が、その縄目をうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいじらしくなって、思わず泣いてしまったと、まあこう云うのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくそう思いましたよ——」

「何とね。」

「<sup>がん</sup>観音様へ願をかけるのも考え物だとな。」

「だが、<sup>じい</sup>お爺さん。その女は、それから、どうにかやって行けるようになったのだろう。」

「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になって居ります。その綾や絹を売ったのを本に致しましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりません。」

「それなら、そのくらいな目に遇っても、結構じゃないか。」

外の日の光は、いつの間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だった竹藪の音が、かすかながらそこここから聞えて来る。往来の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したって、物盗りの女房になったって、する気でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、<sup>おきな ひさげ</sup>扇を帯へさしながら、立上った。翁も、もう提の水で、泥にまみれた手を洗っている——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何ものかを、<sup>ようす</sup>感じてでもいるような容子である。

「とにかく、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まったくさ。お爺さんも、そう思うだろう。」

「手前でございますか。手前なら、そう云う運はまっぴらでございますな。」

「へええ、そうかね。私なら、二つ返事で、<sup>さず</sup>授けて頂くがね。」

「じゃ観音様を、御信心なさいまし。」

「そうそう、明日から私も、お籠こもりでもしようよ。」

(大正五年十二月)



運

平成二十三年四月二十四日 初版

著者

芥川 龍之介

発行所

藍岩堂